

歴史文化クラブ 2月研修会
お水取り発祥の寺・観菩提寺を訪ね
伊賀上野城と松尾芭蕉ゆかりの地を巡る

中井 弘

3月1日(水)西大寺駅南口に27人が参集した。天気は回復して歴文日和だが、風はまだ冷たい。バスは163号線を一路伊賀市島ヶ原へ向かう。

江戸時代の島ヶ原は、生駒暗峠を通過して河内松原に至る、参勤交代にも使われた大和街道の「島ヶ原宿」として栄えていた。

まず鶯宮神社に寄る。参道入口の巨大な石灯籠に驚かされる。天保14年(1843)、村人が米俵を持寄って積上げ建立したという。125段の石段を登ると本殿がある。創立由来は実忠が祀った東大寺の鶯宮社を、その後ここに勧請したという。

次に観菩提寺(正月堂)を訪ねる。鄙びた里に建つ堂々たる重文の楼門と本堂は、室町初期の改築とされる。実に細部まで優美な造りである。天平勝宝3年(751孝謙3年)東大寺の実忠和尚によって伽藍が再興された。本尊は東大寺二月堂と同じ十一面観音菩薩。ここで行われる「修正会」は創始以来1260年以上の歴史を持ち、東大寺二月堂の「修二会」(お水取り)に先駆けて行われている。鶯宮神社の神主二人が正月堂に入り、御祓いのあと法要が始まる。修正会は2月11日「大餅会式」に始まり、12日は水と火の粉を振りまきながら乱舞する荒行、「韃靼の行法」が行われる。庶民的な行事と厳粛な儀式が合わさったもので、「せきのと」と呼ばれ親しまれている。

伊賀盆地に入る。4百万年前は古琵琶湖の底で、湖底が粘土質で稲作に適さない土壌であった。伊賀の農民は忍者という傭兵稼業に就かざるを得なかった。前方に白亜三層の天守閣が一際目立つ。

伊賀上野城前で川井さんの藤堂高虎の解説。戦国武将でありながら築城の名手であった高虎は、加藤清正、黒田官兵衛と並び称される築城三名人のひとりであった。城郭だけでなく、社寺の建立にも数多くの功績を残している。

高虎は伊賀国津藩藩主に着任した時、前藩主筒井家の居城を、大阪城を見据えた軍事的な城郭に改築した。現存する内堀と30mの高石垣から高虎

の技術力を垣間見ることができた。

浅井長政から徳川家康に至るまで7度も主君を替えたことから「武士は二君に仕えず」の時代、世渡り上手・ゴマすり大名と揶揄された高虎だが、家康は彼の築城の手腕を高く評価して大いに活用、秀忠、家光と徳川3代に仕えたことは特筆される。

石段を下り俳聖殿に至る。旅姿の芭蕉を建築で表現した日本建築史上、傑作の八角堂である。内部には伊賀焼の芭蕉像が安置されている。芭蕉の漂泊の旅についての解説が興味深い。29歳で「貝おほい」を編み、天神宮に奉納して江戸に出る。俳句では食えない環境で、水道工事のアルバイトをしながら俳諧修行を続けたという。46歳の「奥の細道」の旅は5か月、2600kmの長旅であった。いつも同道している門人曾良はこの時一人別行動をとることが多かった。曾良は「旅日記」を著わして、幕府の命による情報収集という忍者仕事をこなしていたのではないかと面白い推理である。



芭蕉翁記念館では「芭蕉と近現代俳句の世界展」開催中で、虚子の句に中村不

折の絵の掛軸や、飯田蛇笏の句の掛軸が必見。車中の俳句クイズでは古川さんが流石の全問正解。

芭蕉の生家にも立ち寄る。芭蕉はここで俳諧を学んだ後、江戸に出て俳諧師となり、新しい俳風を打ち立てたが、51歳のとき大坂の地で病に倒れ生涯を閉じた。

伊賀越資料館に寄る。「鍵屋の辻の決闘」で有名な場所で、寛永11年、荒木又右衛門が渡辺数馬に助太刀して数馬の弟の仇を討った事件である。俗に「又右衛門の36人斬り」と有名だが、実際にはたった2人しか斬っていないという。仇討が好きでないという古川さんの説明が面白い。

期待した月ヶ瀬梅林の梅は、一部で見頃であったが、総じてまだ咲き始めで期待はずれであった。

車内で伊賀忍者の歴史などの解説を聞きながら、予定通りに西大寺に到着した。実に盛り沢山の研修であった。